
旅先の宿にて。

Jan Key

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅先の宿にて。

【NZコード】

N3165M

【作者名】

Jan Key

【あらすじ】

主人公の小玉は友人達と一緒に旅に行くことになる。

しかし、その旅先の宿に待ち受けっていたのは…殺人事件。

時間が経つにつれ、宿全体に響き渡る断末魔、減つて行く客数、増えて行く死体…。

主人公達は生きて帰れるのか？

そして、殺人鬼を捕まえることができるのか？…?

殺人事件編
第一話

今年もあとわずかだなあと、つい思つてしまふ12月の上旬のこと。
大学生の俺、小玉 剛はなんにもすることがなく、炬燵に入つてぼ
んやりと過ぐしてゐた。

と、そこへメールが来た。

ケータイのバイブ音が唸る

ひぐりして、一瞬、心臓の鼓動が高鳴る。

「やれやれ……この音はなかなかなれねえな……」
そつづぶやきながら送られてきたメールを確認する。

From · 畠山 雅哉

件名

本文・[「!!ひしゃくり!!」のメールに気づいたら電話くれ！](#)

はあ～、あいつは。まるで変わってないな。俺らが卒業した二年前
と。

力チヤ

「アーティスト」

「おお、ダメダメーんー。」

「本当にひさしぶりだな。ハタケ。んで、話はなんだ？」

「んーとなー…、実は今ダマさん家の近くにいるから行つてもいい

いかな?

ああ、いいよ。おいでおいで。待ってるから。

「あー、なんせ

このやりとりを見てもうればわかるが、ハタケとは高校からの友達だ。
いや、友達じゃ収まらない。あいつの前では決して言わないが、親友だ。
そして、中二病。あいつもあれさえなければ…。

ピンポン。

ん？ウチのチャイムが鳴った。

ハタケ? いや、まさか…… まだ電話を切ってから20秒だったがそこらだ。

とつあえずでなくては。

「はい！今行きますー。」

サンダルに履き、玄関のドアを開ける。

令二一令三が本番紙である。服の片手でもうこじも撕く。

そこに立っていたのは

ハタケ。

満面の笑みのハタケ。と、もうひとり。

こいつのニヒルでクールな顔には見覚えがある……。

思い出した。神童と呼ばれた新野……！

こいつは頭良いから、みんなで神童つてよんでもたつけ。

「おう……ひさしひさしひだな。とりあえず、外寒いから上がりや。」

二人「お邪魔しまーす！！」

殺人事件編第一話（前書き）

殺人事件編第一話

「いやー、寒かつたー。生き返るー。」
ハタケは上着を無造作に脱ぎ捨て、炬燵へと突っ込んでいった。
続いて、神童の新野も。

正方形の炬燵の一边から神童の頭が出てる状態で
「ダマさん、なにしてたのー？」

と聞いてきた。まるで亀がしゃべってるみたいだ。
それに、こいつの語尾を延ばすべくせも相変わらずか。

「一人暮らしだし、つまんねえテレビ見ながら一人酒だ。せつかく
だ、少し飲んでけ。」

「そのつもりー。」と神童。

そう言って、がさごそとビニール袋をあさる。

「はいー！」

出されてきたのは・・・イカのあたりめ、たらチーズ、サラミなど
など。

「こりゃ豪勢な・・・」

よくみると、ハタケもなにやら荷物をあさつてゐる。

「俺は枝豆だよー！煮て食うべー！」

「おまえら、帰る気ないだろ？」「苦笑しながらそう一人に聞いた。

沈黙。

沈黙を破ったのは神童。

「あ、バレた？」

「実はさ、神童と二人で酔いつぶれて終電を見逃すつていう作戦立てたんだが・バレたか。

「い・い・？ダメさん？」

「こういう展開でNOといえないのが、俺の悪いところ。

「わかったわかった。その代わり、準備手伝え。」

殺人事件編第一話

……数十分後。

炬燵の上には酒と大量のおつまみが存在していた。

おつまみと酒を三人で嗜み、話していると本題をおもいだした。

「んで、話ってなんなのさ、ハタケ。」

「ああそうそう、温泉へいこうって誘いにきた。」

「……は？ 神童も来るの？」

「俺もいくよ～」

「どこの温泉？」

「栃木の山奥。ダマさんは運転手つてことで。」

「なに？ ジヤ、運転手確保するためにきたのか！？」

「そうだよ。」

「ふざけんり……」

「混浴だよ？」

「いつだ？」

「3日後。」

「了解。」

こうして温泉へ行くことになった。

それから、俺ら三人は昔話をしつつ夜明けまで飲み明かした。

その後はよく覚えてない。

きづいたら翌日の正午を過ぎていた。

あの一人は……爆睡中。

叩き起^ハこし、帰らせた。

旅行が楽しみである反面、心配にもなつてきた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3165m/>

旅先の宿にて。

2010年10月11日04時06分発行